

「声」の力

山本淳子

この原稿を書いている今、全国高校野球選手権の地方大会が行われている。埼玉大会で今年スコアラーを務めた山口眞士さんは、もともとは選手であった。しかし昨年 11 月に飲酒運転の車にはねられ、脳に損傷を受けたことで意識不明の状態となった。両親は医師から、目を覚ますか覚まさないかは人によるが、声をかけ続けてほしい、と告げられたそう。コロナ禍で面会も週 1 回に限られていた中、チームメイト 50 人が意識のない山口さんのためにビデオレターを作り耳元で聞かせたという。すると山口さんは涙を流し、そこから少しずつ意識を取り戻し野球部に復帰することができた。山口さんの高校は残念ながら 3 回戦で敗退してしまったが、彼は「自分の武器は声」と、ベンチから声を出し続けたそう。

時はさかのぼり、2015 年のこと。アメリカのテキサスで 27 歳の青年が脳卒中で倒れ、「脳死」と宣告された。医師は父親に臓器提供の同意を求めた。ほかの家族が同意する中、父親は息子の手を握った際、彼が生きようとしていることが分かったという。このままでは息子の命がなくなると焦り、同意を迫る医師に銃を向け威嚇し、病院に立てこもった。そして警察が到着するまでの間、父親はずっと息子の手を握りしめ声をかけ続けたそう。やがて父親が逮捕され連行されようというとき、なんと息子は意識を取り戻したのである。誤診であったのか本当に脳死だったのかはわからない。いずれにせよ、体を張って息子を守ろうとした父親の声が青年に響き、彼が蘇るきっかけになったのではないだろうか。

私事になるが、私の長男も 27 歳の時、急性心不全で倒れ緊急手術を受け、しばらくは意識不明の状態であった。医師からは「脳に損傷が及んでいるかどうかわからないが、とにかく声をかけ続け、手を握り続けてほしい」と言われた。私たち家族は必死に耳元でささやいたり、歌を歌ったりした。何週間目かのある日、私のある声かけに彼は涙をこぼし、小さくうなずいたのだ。そこからゆっくりと回復していった。

3 例とも幸運なケースであることに違いない。しかし共通して言えることは「声」が病で苦しむ人の心の糧になり、時には生きる力につながるということである。教育にも同じことが言えると思う。学びが思うように進まなかったり試験に合格できなかったり、あるいはほかのことで悩んでいる学生に出会ったら「声」のパワーを信じ、心を込めて話しかけるよう心掛けたいと思う。私の声かけなど微力にすぎないだろうが、少しでも「がんばってみよう」という意欲につながれば、これほどうれしいことはない。

参考文献

「意識不明…高3 球児、飲酒運転の車にはねられる…」埼玉新聞（2024 年 7 月 20 日）

<https://news.yahoo.co.jp/articles/20ff67e406b4475fba188fb136ab425e2eadb622>

“Father brings gun to hospital to buy time for his ‘brain dead’ son”, Tribune Media Wire
(Dec.23, 2005)

<https://www.fox13now.com/2015/12/22/father-brings-gun-to-hospital-to-buy-time-for-his-brain-dead-son>

（やまもと・じゅんこ 教授）
